

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：23901
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：19K00058
研究課題名（和文）辜鴻銘研究——東西思想交流の観点から

研究課題名（英文）Research on Gu Hongming

研究代表者

川尻 文彦（KAWAJIRI, Fumihiko）

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：20299001

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：辜鴻銘の東西文化論を検討することが本プロジェクトの課題であった。辜鴻銘については在日時期の講演活動や欧文で発表した諸論説について検討を加え、中国大陸での最新の研究成果も参照し、論文を発表したことがある。辜鴻銘は五四新文化運動時期に欧州留学から帰国し、北京大学で教鞭をとり、言論活動を行った。その意味で「新文化運動」の一翼を担っていたといえるが、辜鴻銘に対する学術的な評価は難しい。北京大学の同僚からも様々な評価を得ていたが、それらは「奇人」「古怪」といった特異な外見や奇矯な性格に左右されていた表面的なものであった。本プロジェクトではより広い視野から辜鴻銘を思想的な位置づけることを目的とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本プロジェクトでは辜鴻銘研究の一環として、迂遠ではあるが、より広い視野から辜鴻銘の東西文化論を中国近代思想研究において位置づけることを目指した。具体的には、洋務時期の「中体西用論」、梁啓超の文明史、明治日本での西洋の「学知」に対する理解、東西文化論戦、胡適の「全面的西洋化論」等の東西文明に論及した中国近代の思想家たちの議論を調査することである。その成果は拙著『清末思想研究——東西文明が交錯する思想空間』（汲古書院、2022年）に結実し、辜鴻銘もその中に位置づけられている。コロナによる資料調査の不便もあり、1920年代の辜鴻銘の訪日時期の関連資料については今度のさらなる史料調査を待ちたい。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I would like to analyze Gu Hongming's thought. He had stayed in European countries for many years and wrote some essays in German and English. His thought was very influential in western countries. But his thought has not analyzed in historical and intellectual context completely by scholars so far. In this research project, firstly I would like to analyze many Chinese intellectual's viewpoints about Eastern and Western civilizations. Then I would like to refer to his ORIGINAL viewpoint about the Chinese and Western civilizations.

研究分野：中国近代思想

キーワード：中国近代思想

1. 研究開始当初の背景

辜鴻銘の東西文化論を検討することが本プロジェクトの課題であった。辜鴻銘については在日時期の講演活動や欧文で発表した諸論説について検討を加え、中国大陸での最新の研究成果も参照し、論文を発表したことが私にはすでにある。その基礎の上に本研究プロジェクトはスタートした。

2. 研究の目的

辜鴻銘は五四新文化運動時期に欧州留学から帰国し、北京大学で教鞭をとり、言論活動を行った。その意味で「新文化運動」の一翼を担っていたといえるが、辜鴻銘に対する学術的な評価はなかなか難しい。研究者によってさまざまであり、一定しない。当時、北京大学の同僚からも様々な評価を得ていたが、それらは「奇人」「古怪」といった特異な外見や奇矯な性格に左右されていた表面的なものであった。そのためそのような先行研究の反復をしても研究上の意義は大きくないと考え、本研究プロジェクトでは、迂遠ではあるが、一旦辜鴻銘を離れ、より広い視野から辜鴻銘を中国近代思想史の中に位置づけることを目的にすることにした。

3. 研究の方法

辜鴻銘の東西文明論を検討するための基礎作業として、近代中国では西洋と東洋の「文明」はどのように理解されたのか、中国の知識人たちは「文明」をどのように考えたのか、について研究を進めることにした。この研究テーマはどこから手を付けたらよいのか分からないくらい巨大なものである。中国の知識人たちにとって「文明」が存在したことに気がついたのは近代になってからである。中国には五千年にも及ぶ中華文明があるのではないかと反論する人がいるだろう。はるか古の中国において伝説的な帝王や聖人による理想的な政治が行われた時代であると後世の儒者たちに崇拜されていたことは事実である。しかし彼らはそれを「文明」とは考えなかった。そもそも civilization の訳語として文明という漢語が使われだしたのは、たかだかここ百数十年にすぎない。中国の知識人たちが中国文明の存在に思い至ったのは、中国文明に脅威を与える西洋文明の存在に気づかされてからである。軍事力、政治経済や科学技術で圧倒する西洋が中国の目の前に登場した時、つまり「西洋の衝撃」以降のことである。そうになると私たちは「西洋の衝撃」以降の中国知識人の知的な営みを辿っていくことになる。

具体的に例を挙げる。洋務時期の「中体西用論」、一八七〇年代末に国外に派遣された外交官たち、郭嵩燾 (1818-91、イギリス)、陳蘭彬 (1816-95、アメリカ)、何如璋 (1838-91、日本)。

「時勢の激変を論じる」(1895)と題した政論を発表した嚴復。梁啓超の文明史。梁啓超は「中国史叙論」(1901年)で中国とは何か、中国史とは何かについて思索をめぐらした。第一次世界大戦中の欧州の旅行記『欧遊心影録』は梁啓超の思想に新展開をもたらした。明治日本での西洋の「学知」に対する理解。中華民国時期に行なわれた東西文化論戦は多くの知識人を巻き込んだ。胡適の「全面的西洋化論」等。東西文明に論及した中国近代の思想家たちの議論を丹念に時間をかけて調査することが必要になる。

中国の知識人にとって、中国の文明とは何か。そういった問いかけがなされる時には西洋文明が比較の対象になるのは自然である。しかし、東西文明比較論は学問的なものではないという立場もありえる。というのは、西洋文明も東洋文明もそれぞれ雑多で多面的な要素を有しており、それは時代によって変遷し、固定的に捉えることはできない。比較の視点を取り入れる場合、西洋文明と中国文明のそれぞれごく一部の要素を取り出して、論者の各自の観点から分析を加えることになる。そこに科学的な客観性を担保することは難しい、と。これに近似する批判は今日にいたるまでしばしば提出され、胡適の論点にも見える。そもそも中国の文明とは何かを定義づけることは非常に困難であり、つまり定義のできない中国文明の中にある複数の事物や概念を西洋文明のそれと突き合わせて「比較」し、場合によっては「調和」や「融合」などをあれこれ論じる。研究者によっては根拠のない「空中戦」の議論をひたすら繰り返しているだけと見る向きもあろう。にもかかわらず、私が強調したいのは、東西文明比較論は今日も中国で、同時に世界で語られ続けているのはなぜか。それは、東西文明論とは、中国の知識人たちにとって「他者」である西洋文明を論じることで、「他者」を鏡にして「自己」である中国を論じることになるからである。つまり東西文明論とは中国の「自画像」を描くことだからである。それは私たち日本人にとって中国の知識人たちが中国という存在をどのように捉えているのかを知る格好の手がかりといえよう。

4. 研究成果

以上の私の問題意識は本研究プロジェクトの研究課題である「辜鴻銘研究——東西思想交流の観点から」を研究面で深化させることを意図していたものである。上の記述の中で辜鴻銘は直接的には登場しないが、私の問題意識や研究関心として辜鴻銘はつねに念頭にあった。ただし、近代中国における東西文明論そのものが巨大な研究課題であり、一朝一夕には分析・解明できる性格のものではないので、今後の研究の発展を期した基礎的な作業に止まったことをご理解いただきたい。中国近代思想で展開された東西文明論における辜鴻銘の思索の位置づけに

については、多くの検討すべき課題が残されたままであるが、一つの試みとして、拙著『清末思想研究——東西文明が交錯する思想空間』（汲古書院、2022年）で若干の分析を行った。辜鴻銘についての専論も収録されているので、こちらをご参照いただければさいわいである。近代中国における東西文明論については中西輝政編『文明と覇権から見る中国』（ウェッジ、2022年）に採録された「近代中国の知識人たちは「文明」をどのように捉えたのか」で平易に論じた。

コロナによって各地の図書館・文書館での資料調査が一時期不可能になったこともあり、1920年代の辜鴻銘の訪日時期の関連資料については今度のさらなる史料調査の機会を待ちたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 川尻文彦	4. 巻 23
2. 論文標題 日本留学時期の李大釗――年譜的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知県立大学国際文化研究科論集	6. 最初と最後の頁 233-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00004874	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川尻文彦	4. 巻 2021（3）
2. 論文標題 李大釗「青春」考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本研究 遼寧大学日本研究所	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川尻 文彦	4. 巻 53
2. 論文標題 李大釗の「青春」について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知県立大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 322-342
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00004462	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川尻 文彦	4. 巻 74(5)
2. 論文標題 五四を思い起こす	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国研究月報	6. 最初と最後の頁 41-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川尻 文彦	4. 巻 21
2. 論文標題 中国近代思想研究方法序説(三)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知県立大学国際文化研究科論集	6. 最初と最後の頁 226 - 244
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.15088/00004332	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川尻 文彦	4. 巻 14
2. 論文標題 中国近代思想覚書――「思想連鎖」と「空間」論的転回	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 共生の文化研究	6. 最初と最後の頁 86 - 87
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.15088/00004132	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 川尻文彦
2. 発表標題 明治日本の教科書をめぐる日本・清国間の著作権問題――斎藤秀三郎『正則英文教科書』を例にして
3. 学会等名 神奈川大学人文学研究所・日中関係史共同研究 第86回例会7/31
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川尻文彦
2. 発表標題 グローバルヒストリーの中の中国近代思想
3. 学会等名 愛知県立大学academic day(教員研究発表会)9/8
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川尻文彦
2. 発表標題 明治日本の教科書と中国――版權問題を中心に
3. 学会等名 日本現代中国学会全国学術大会、西南学院大学10/24
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川尻 文彦
2. 発表標題 梁啓超「東学」再論
3. 学会等名 日本現代中国学会東海部会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 川尻文彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 470
3. 書名 清末思想研究――東西文明が交錯する思想空間	

1. 著者名 孫安石・大里浩秋編・川尻文彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 485
3. 書名 『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』 「正則英語学校と清末の中国人留学生――上海での教科書裁判の紹介を兼ねて」	

1. 著者名 中西輝政編・川尻文彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ウェッジ	5. 総ページ数 302
3. 書名 『文明と覇権から見る中国』 「近代中国の知識人は「文明」をどのように捉えたのか」	

1. 著者名 黄俊傑・安藤隆穂編・川尻文彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 国立台湾大学人文社会高等研究院	5. 総ページ数 451
3. 書名 『東亜思想交流史中的脈絡性轉換』 「梁啓超「東学」重探－是福澤諭吉？ 還是德富蘇峰？」	

1. 著者名 湯浅 邦弘	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 364
3. 書名 中国思想基本用語集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------